

通崎睦美（木琴）

1967 年京都市生まれ。京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。マリンバのソリストとして活動する中、2005 年東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会（指揮 / 井上道義）で、木琴の名手・平岡養一氏が初演した紙恭輔「木琴協奏曲」（1944）を平岡氏の木琴で演奏。それを機に、氏の愛器、マレットや楽譜を譲り受けた。以後、演奏・執筆活動を通して木琴の復権に力を注いでいる。『木琴デイズ　平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』（講談社、2013）で、第 24 回吉田秀和賞、第 36 回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）受賞。2026 年、白水社より増補版が刊行された。2018 年ニューヨーク州立大学オスウィゴ校、2024 年クッツタウン大学の招きで渡米、コンサートやマスタークラスを行った。文筆家としても活動。著書に『天使突抜おぼえ帖』（集英社インターナショナル）他。2021 年、第 39 回京都府文化賞功労賞受賞。

釋　伸司（ヴァイオリン）

京都市立芸術大学卒業。在学中よりテレマン室内管弦楽団に在籍。16 年間コンサート・マスター、ソリストとしてサントリー音楽賞をはじめ数々の受賞に貢献、1995 年退団。現在、いずみシンフォニエッタ大阪、マイハート弦楽四重奏団広島メンバー。岡山フィルハーモニー管弦楽団、アンサンブル神戸首席奏者、アンサンブルアッサンブラージュ主宰、神戸女学院大学非常勤講師。

大海佳之（ヴァイオリン）

京都市立芸術大学を経て、桐朋学園大学大学院修了。2013-2016 年兵庫芸術文化センター管弦楽団に在籍。現在、岡山フィルハーモニー管弦楽団団員。ソロのほか、関西を中心にオーケストラへの客演、室内楽など幅広く活動している。

松田美奈子（ヴィオラ）

京都市立芸術大学大学院卒業、同大学大学院修了。第二回宝塚ベガ音楽コンクール室内楽部門入賞。京都フィルハーモニー室内合奏団を経て、室内楽奏者、オーケストラ奏者として活動している。

細谷公三香（チェロ）

ヴェローナ国立音楽院を首席で卒業。ザルツブルグモーツァルテウム大学院、ミュンヘンにて研鑽を積む。これまでに兵庫芸術文化センター管弦楽団、オーケストラジャパンに在籍。第 29 回丹波の森国際音楽祭シンボルアーティスト。兵庫県芸術文化協会ひょうごアーティストサロン賞受賞。

主催：通崎睦美　マネジメント：ヒラサ・オフィス　協賛：キッコーマン株式会社　茂木修　辰馬建二　たちばな教養学校Ukon　design_TAKASHI TANIMOTO

萬

「生しょうゆ」の「生」って何？
って思ってたけど、そうか、これなんだあ。
フレッシュな味わいに、素材がぐんと引きたつ感じ。
その秘密は、火入れをしない非加熱製法から生まれた
鮮やかな色、おだやかな香り、まろやかで豊かなうまみ。
そして、開けてからも鮮度をキープする、密封ボトル。
一滴ずつ使えて、最後の一滴まで新鮮。
いつもの料理がほら、ひとつ上の味になる。
いつでも新鮮®
しぼりたて生しょうゆ

あ、しぼりたて。
が、いつでも新鮮。

色鮮やか 冴みまろやか
いつでも新鮮。
キッコーマン
超特選
しぼりたて
生
しょうゆ
450ml
開けて120日間鮮度を保つ
kikkoman

しぼりたて生　検索
キッコーマンお客様相談センター 0120-120-358

kikkoman
おいしい記憶をつくりたい。



本日は、「通崎睦美木琴リサイタル～2つの扉」にお越しくださりありがとうございます。
2026年3月末、白水社編集部の方との出会いから『木琴デイズ　平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』（講談社）の増補版を刊行する話が持ち上がりました。刊行が決まった初夏は、ちょうどこのリサイタルの内容を考えていた時期でもありました。
まだ原稿も完成していませんでしたが、秋に本が刊行されれば「書籍から」「音楽会から」、木琴の世界へと通じる2つの扉を開くことができるのではないか。そんな思いから、サブタイトルを「2つの扉」としました。ちょっと無謀な計画ではありましたが、予定通り2つの扉を開くことができました。この場を借りて、関係者の皆さんに感謝申し上げます。
プログラムでも、前半のいわゆるクラシック音楽、そして後半の日本民謡も含む親しみやすいメロディーの小品という、対照的な2つの扉が開いています。
本日ご来聴くださった皆様には、どの扉からでも自由に入って、木琴の世界をお楽しみいただけると嬉しく思います。

通崎睦美



写真：平野愛

本日使用する楽器について

Deagan Artists' Special Xylophone No.266

木琴の名手・平岡養一（1907-1981）が愛用した木琴。
1935年、平岡養一がシカゴのディーガン社を訪れ、鍵盤を選んで購入した4オクターヴのDeagan Artists' Special Xylophone No.264がこの楽器の原型である。戦中に日本へ帰国した平岡は、1962年に渡米した際、再びディーガン社に出向き、低音部の鍵盤7本を買い足して日本に持ち帰った。それに合わせて、YAMAHAで共鳴管とボディを製作することで、4.5オクターヴの音域を持つNo.266型に改造した。

Deagan Artists' Special Xylophoneのシリーズが作られた1920年～1940年当時、No.266は25～30台ほどしか製造されておらず、現存するのは15～20台程度とみられている。
特にこの楽器は、平岡自身、また元ミヤカワマリンバの社員・時庭忠久が調律を行っており、ディーガンのオリジナル調律とはひと味違った独自の音色を持つ。

2005年に通崎が譲り受けてからは、動かなくなったキャスターやネジのレプリカを作るなど（製作：黄瀬剛）、できる限り「平岡オリジナル」に近い状態で使えるよう、工夫を重ねて使用している。

通崎睦美木琴リサイタル～2つの扉
TWO Gateways

Ⅰ

〈木琴＋ヴァイオリン＋ヴィオラ＋チェロ〉〈xylophone＋violin＋viola＋violoncello〉

弦楽四重奏曲　第67番　ニ長調　「ひばり」｜J.ハイドン
String Quartet in D major "The Lark" Op. 64-5　*J.Haydn*
第1楽章 アレグロ・モデラート　第4楽章 フィナーレ：ヴィヴァーチェ
Ⅰ.Allegro Moderato　Ⅳ. Finale：Vivace

〈木琴＋ヴァイオリン〉〈xylophone＋violin〉

44の二重奏曲 より｜B.バルトーク
From 44 Duos for Two Violins　*B. Bartók*
44.トランシルヴァニアの踊り　14.枕の踊り　41.スケルツォ　21.新年のあいさつ　42.アラビアのうた
44.Transylvanian Dance　14.Pillow Dance　41.Scherzo　21.New Year's Greeting　42.Arabian Song

〈木琴独奏〉〈xylophone solo〉

木霊～木琴独奏のための｜鷹羽弘晃
KODAMA～for xylophone solo　*Hiroaki Takaha*

〈木琴＋弦楽四重奏〉〈xylophone＋string quartet〉

アイネ・クライネ・ナハトムジーク｜W.A.モーツァルト/松園洋二編
Eine kleine Nachtmusik　*W. A. Mozart / arr. Y.Matsuzono*
Ⅰ.アレグロ　Ⅱ.ロマンス:アンダンテ　Ⅲ.メヌエット：アレグレット　Ⅳ.ロンド：アレグロ
Ⅰ.Allegro　Ⅱ.Romance:Andante　Ⅲ.minuetto:Allegretto　Ⅳ.Rondo:Allegro

Ⅱ

〈木琴＋弦楽四重奏〉〈xylophone＋string quartet〉

金春マーチ｜奥村貞吉/松園洋二編
Kompal March　*T.Okumura / arr. Y.Matsuzono*

奥さまお手をどうぞ｜R.エルヴィン/野田雅巳編
Ich küsse Ihre Hand, Madame　*R. Erwin /arr. M.Noda*

みかんと青空・潮風とレモン・月と黒雲｜野田雅巳
Tangerine under the Blue Sky　Lemon in the Sea Breeze　The Moon, Dark Clouds　*Masami Noda*

月光値千金｜L.シェイ/松園洋二編
Get Out and Get Under the Moon　*L. Shay / arr. Y.Matsuzono*

金髪のジェニー｜S.フォスター/松園洋二編
Jeanie with the Light Brown Hair　*S. Foster / arr. Matsuzono*

ベートーヴェンの主題によるロンディーノ｜F.クライスラー/松園洋二編
Rondino on a Theme by Beethoven　*F. Kreisler / arr. Y.Matsuzono*

ボッケリーニの様式によるアレグレット
Allegretto in the Style of Boccherini　*F. Kreisler / arr. Y.matsuzono*

お江戸日本橋 ～『日本組曲』より｜山田耕筰/松園洋二編
O-Yedo Nihonbashi ～Suite Japone　*Kôsçak Yamada / arr. Y.Matsuzono*

八木節｜群馬・栃木県民謡/松園洋二編
Yagi-bushi　*Folk Song from Gunma and Tochigi / arr. Y.matsuzono*

サマー・タイム ＆ ああ、俺にはなにもないさ｜G.ガーシュイン/松園洋二編
～歌劇『ポーギーとベス』より
Summer time & I got plenty o' nuttin' from the opera "Porgy & Bess"　*G.Gershwin / Y.Matsuzono*

プログラム・ノート～曲目解説、あるいはこぼれ話

通崎睦美

第一部

弦楽四重奏曲　第67番　ニ長調　「ひばり」　｜J.ハイドン

自身の楽譜を整理していたら、ハイドンの弦楽四重奏曲第67番「ひばり」のスコアが出てきた。そういえば、平岡養一のレパートリー・リストにあったので、いつか弾いてみようと楽譜を購入したのだった！そう思い、改めて楽譜をみると面白そうなので今回のプログラムに入れることにした。練習しながら「平岡さんはどんな風に弾いていたのかな」と音源を探すと、平岡が弾いていたのは「ひばり」ではなく、弦楽四重奏曲第32番「鳥」の第4楽章だった。いつか「鳥」も演奏してみたいと思います。
ちなみに、平岡は「鳥」を、ヴァイオリンとピアノの編曲版で弾いていたが、本日の「ひばり」は原曲のファースト・ヴァイオリンのパートをそのまま木琴に置き換えて演奏する。

44の二重奏曲 より　｜B.バルトーク

ドイツの音楽家、音楽教育者であったE.ドフラインの委嘱により、ヴァイオリンのレッスンで使うことを想定して書かれたヴァイオリン・デュオのための曲集。44曲のうちの42曲が、民俗音楽の編曲作品である。私自身もこれまで「マリンバ＋チェロ」（野田雅巳編）、「ハーモニカ＋マリンバ」、「木琴＋リコーダー」等の編成に置き換えて演奏してきたが、本作はヴァイオリン以外の楽器で演奏されることも多い。ちなみに、バルトーク自身も、『小組曲』と題し、6曲選んでピアノ独奏用に編曲している。

木霊 ～独奏木琴のための　｜鷹羽弘晃

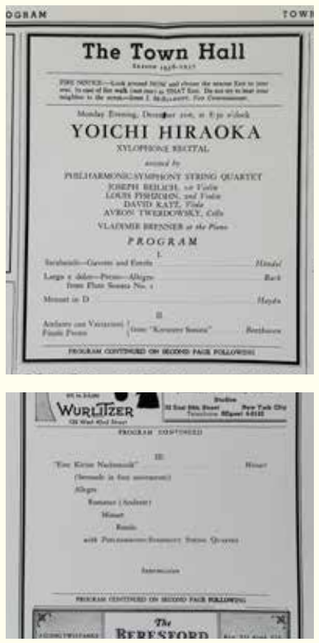
「通崎さんの歌う木琴。その音色に導かれて2013年に作曲した。可愛くて人なつっこい木琴の歌は人間のものではなく、もっと高く神々しいところから降ってくるように感じる。それは一打一打、音板に宿る木の精霊が飛び出してくるからではないか！という想像から〈木霊〉という題名を思いついた。「エコー」の意味も含み、固いバチと柔らかいバチを1本ずつ持ち、左右の手で持ち替えながら2つの音色が奏でられる。」（鷹羽弘晃）

アイネ・クライネ・ナハトムジーク　｜W.A.モーツァルト/松園洋二編

「平岡養一の勝負曲は？」と尋ねられれば、私は『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』と答える。
1936年、ニューヨークのタウンホールで行われたアメリカにおける初めてのリサイタルで、ニューヨーク・フィルのメンバーらからなるフィルハーモニック-シンフォニー弦楽四重奏団と演奏。〈写真1〉1940年、アメリカで初めてリリースしたレコード・アルバム『クラシック音楽による木琴リサイタル』（デッカ）〈写真3〉にも、ウラディーミル・ブレナーのピアノ伴奏で第1楽章を収録している。戦中、日本に帰国。1942年末にビクターから発売されたレコードでも、マンフレット・グルリット指揮/東京交響楽団と本作を共演。また、日本で収録した平岡の演奏に、小澤征爾立ち会いのもと、アメリカで1936年に共演した弦楽器奏者が音を重ねた朝日ソノプレス盤（1962）というちょっとした珍品も残る。そして、1963年、戦後再渡米した際のカーネギー・ホールリサイタルを記念したレコード〈写真2〉、さらに、最晩年「木琴人生50年」を記念するツアーに合わせて発売されたフォンテック盤（1977）などでも聴くことができる。ピアノ伴奏の時は、ヴァイオリンとピアノのために編曲されたカール・フィッシャー版の楽譜を使用していたようだ。弦楽四重奏との演奏では、木琴はファースト・ヴァイオリンのパートを演奏。ファーストとセカンド・ヴァイオリンは、編曲というより、木琴を引き立てるよう、ちょっとした工夫をして演奏、ヴィオラとチェロはオリジナルのままを弾いた。
本日は、原曲にはない要素が、時に茶目っ気を持って見え隠れする松園洋二による木琴と弦楽四重奏のための編曲版で演奏する。



〈写真2〉『お江戸日本橋』も収録されたレコード



〈写真1〉タウンホールでのリサイタル、プログラム（部分）





〈写真3〉名門デッカから発売されたレコード

第二部

金春マーチ　｜奥村貞吉/松園洋二編

銀座7丁目にかつてあった映画館「金春館」で、映画の上映前に必ず演奏された、金春館オリジナルのマーチ。映画好きの姉と金春館に通っていた平岡養一は、この曲で活躍する木琴の音色に心惹かれ、木琴を始めることになった。ちなみに、この時に木琴を演奏していたのは、後に作・編曲家として活躍する仁木多喜雄であると思われる。本日は、オリジナルの和声を少し膨らませ、対旋律を加えた松園洋二の編曲版で演奏する。

奥さまお手をどうぞ　｜R.エルヴィン/野田雅巳編

1928年に作曲されたドイツのポピュラーソング（原題：Ich Küsse Ihre Hand, Madame ～奥様、私はあなたの手にキスします）。当時のヨーロッパでは、アルゼンチンから伝わったタンゴが流行し、ヨーロッパ産の自称「タンゴ」がたくさんうまれたらしい。この曲の初版楽譜にも、譜面冒頭に“Tempo di Tango”（タンゴのテンポ、ノリで）と指定があるのだが、どこがどうタンゴなのかは、よくわからない（おもしろいことに、翌年アメリカで出版された楽譜では、「タンゴ」という表記は消えている）。日本の歌謡曲も、その時代の流行りにあわせて「ラテン風」「ロックンロール風」がうまれたり、あるいは「○○ブルース」が全然ブルースじゃなかったりしたが、似たようなものだろうか。
さて、このたびの編曲ではいかに？　（野田雅巳）

ミカンと青空・潮風とレモン・月と黒雲　｜野田雅巳

『ミカンと青空』は、京都橘大学が運営する「たちばな教養学校Ukon」（学頭：河野通和）の「始業の音楽」として作曲された。今回演奏する版は、オリジナルの木琴とギターのための作品を元に、コンサート用として作られたものである。「始業の音楽」としてプレゼンテーションされた3曲中、採用されなかった『潮風とレモン』は、後に「終業の音楽」として採用された。採用されなかった1作品もコンサート版として完成され、『月と黒雲』と名付けられて、3部作が誕生した。

> **「おおきな窓から、冬の青空の下、なだらかに連なる京都の山々がくっきりと見える。ここで流れる音楽も、こんなふうに透き通って、風通しのよいものでなくては」以前、Ukonのスタッフの方から『ミカンと青空』についてコメントを求められた際に、はじめて教室をみせていただいた時のことを書いた（みかんはUkonのアイコン）。**

プレゼンにあたっては、じぶんのなかでも、この曲が本命で、次にそれとは対照的な雰囲気の曲を書いた。これが『潮風とレモン』。そしてもう1曲、ジョーカー的な意外性のあるものも入れておきたかったので『月と黒雲』をつくった。
選定の結果もそのようになったのだが、コンサート版をつくる機会をいただいて、落選した『月と黒雲』もいっしょに聴いてもらえることになった。めでたし。（野田雅巳）

月光値千金　｜L.シェイ/松園洋二編

オリジナルは、1928年アメリカで出版された『Get Out And Get Under The Moon』（作曲：Larry Shay、作詞：William Jerome＋Charles Tobias）。同年に、ポール・ホワイトマン楽団などによって録音された。戦後、ドリス・デイ、ナット・キング・コール他多くの歌手が取り上げ、スタンダード・ナンバーとなる。日本では、1936年、エノケンこと榎本健一が日本語で歌って大ヒットした。本日演奏するのは、タイトルにちなんで、ドビュッシー『月の光』の引用ではじまり、後半には、ラヴェル『子供と魔法』のフォックストロットの伴奏型が現れる楽しい編曲。

金髪のジェニー　｜S.フォスター/松園洋二編

平岡の演奏記録をみると、『草競馬』『おおスザンナ』など、フォスター作品をよくとりあげている。本日演奏する松園洋二編『金髪のジェニー』は、木琴と共に、弦楽器の各パートが豊かに歌い上げる。

ベートーヴェンの主題によるロンディーノ　｜F.クライスラー/松園洋二編
ボッケリーニの様式によるアレグレット　｜F.クライスラー/松園洋二編

平岡は、『愛の喜び』『美しきロスマリン』など、クライスラー作品もよく演奏していた。今日演奏する編曲版では、木琴はヴァイオリンのパートをそのまま演奏、原曲のピアノ伴奏部分が弦楽四重奏用に編曲されている。室内楽らしさが一層引き立つアレンジ。

お江戸日本橋　｜山田耕筰/松園洋二編

大正13年、セノオ音楽出版社より「セノオヤマダ楽譜1013番」として出版された、ヴァイオリンとピアノのための楽曲『日本組曲』の第2曲。ちなみに、第1曲は「さらし」、第3曲は「かっぽれ」。以下、楽譜に記された紹介文を転載する。（旧字体は、新字体に改めている。）

〈日本組曲（スウイト・ジヤポーネ）は山田耕筰氏が1912年の春、伯林（ベルリン）滞在中、露国の有名な舞踊家ウラヂミール・ドウ・ラザレーウイツチ氏夫妻のために作曲した3曲より成るオーケストラ曲で、3曲とも日本古来の歌謡を主題としたことは茲（ここ）にいうまでもない。この曲の日本に於ける初演奏は、山田氏が独逸から帰朝して組織した東京フィルハーモニー管弦楽団によつて大正4年の秋、帝劇に於いてなされた。
その後1918年10月山田氏がニウヨークのカーネーギーホールに於いて開いた第一回演奏会の際、主催社側の希望によりプログラムに加へられ、95人により成るスィムフォニーオーケストラによつて演奏され、非常な好評を博し、有名な米国の音楽出版社カール・フィッシャーからそのオーケストラ・スコーアが出版され、今日米国の各都市に於て盛んに演奏されて居る。
今回セノオ・ヤマダ楽譜の一つとして出版されるものは、それを平易なヴァイオリン曲として山田氏が特にアレンヂされたもので、日本の好楽家が朝夕演奏するには好適の楽曲である。〉





「平岡養一（1907-1981）ってどんな人？」「木琴とマリンバは、どう違う？」等のコラムが掲載された

「通崎睦美木琴リサイタル
～木琴で愉しむオペラの世界」（2024）

「通崎睦美木琴リサイタル
～バッハとエノケン」（2025）

のプログラムはこちらから御覧いただけます。

2007年にリリースしたCD『1935』でも松園洋二編曲で室内オーケストラと演奏しているが、今回の木琴＋弦楽四重奏版には、水墨画のような味わいがある。

八木節　｜群馬・栃木県民謡/松園洋二編

松園洋二によって木琴とピアノのために編曲された『八木節』の、編曲者によるリアレンジ。途中には、平岡養一が委嘱したが演奏することのなかった黛敏郎『木琴小協奏曲』の冒頭部分が引用され、お囃子的な雰囲気を醸し出す。

サマー・タイム ＆ ああ、俺にはなにもないさ～歌劇「ポーギーとベス」より
｜G.ガーシュイン/松園洋二編

共演者としてピアノを弾いていただくことも多い作曲家の松園洋二さんに、レパートリーの相談をすることがある。以前「オペラ」をテーマにプログラムを組み立てる際、お勧めの曲がないか尋ねたところ「ガーシュインの『ポーギーとベス』はどうか」とご提案をいただいた。そこで、オペラの中から『サマータイム』『ああ、俺にはなにもないさ』の2曲を入れて編曲していただくようリクエストしたところ、オペラから他の場面の音楽も巧みに組み合わせた作品が出来上がった。本作は、当初、木琴とピアノのために編曲された。木琴＋弦楽四重奏版では、弦楽器がオーケストラのようにダイナミックに響き渡る。

白水Uブックス
増補
木琴デイズ
平岡養一「天衣無縫の音楽人生」
通崎睦美
戦前の米国で毎朝ラジオ番組を担い、帰国後は「国民的音楽家」となった木琴奏者、平岡養一。彼の楽器を継承した演奏家が紡ぐ傑作評伝


第24回吉田秀和賞
第36回サントリー学芸賞
ダブル受賞の名著
ふたたび
白水社
HAKUSUISHA

大人だって未完だ。

「生きる」をもっと深く味わう。
たちばな教養学校
Ukon